

高校生はいつ、どのように進路を決めるのか
—継続的調査における進路未定者の特性と動向—

小西 尚之*

“Integrated Course” Senior High School Students’ Career Decision-Making
Process: A Longitudinal Study on Indecisive Students’ Characteristics and
Trends

Naoyuki Konishi*

高校生はいつ、どのように進路を決めるのか — 継続的調査における進路未定者の特性と動向 —

小西 尚之*

“Integrated Course” Senior High School Students’ Career Decision-Making Process: A Longitudinal Study on Indecisive Students’ Characteristics and Trends

Naoyuki Konishi*

Received December 8, 2014

Abstract

The purpose of this paper is to clarify how the curriculum of “Integrated Course” senior high school affects the career choice of students. Students with vague course hope entered “Integrated Course” senior high school and experienced various learning courses in their first year. In their first year, they choose subjects according to their career expectations, but do subject choices ultimately have any influence on students’ course choices? Based on the result of a panel study in a certain “Integrated Course” senior high school, I clarify a process of a change of the career choice of the students from the viewpoint of curriculum tracking.

In this paper, I pay attention to the cause of change in expectation from “course undecided” to “entering a university” or “getting a job”. As a result of this analysis, I found that individual and family backgrounds had no effect on the change in the expectation. In addition, high school grades and course credits of mathematics had no effect on the change, too. It becomes clear that course credits of vocational subjects influence the change. Based upon the foregoing, it is suggested that the amount of credits of vocational subjects affects the course change in expectation from “course undecided” to “getting a job”. In addition, there was a statistically meaningful effect on the change. I used logistic regression analysis with individual subject grades, gender, domestic study time, and curriculum as the main independent variables to study the overall effect of these factors on the individual’s course change.

In addition to this, I analyzed these effects from a time-varying perspective. The result showed that the students who took many credits of vocational subjects were more likely to change the course in their first year of school life. This shows that curriculum tracking affects students’ course choices soon after entering “Integrated Course” senior high school. Subject choices in their first year decide their career choices. This research backed up the fact by data.

*未来創造学部 School of Future Learning

1. 問題の所在

本稿の目的は、「高校卒業後の進路が未定」のまま総合学科高校に入学した生徒たちの3年間の進路選択の動向を明らかにすることによって、「高校教育改革のパイオニア」と言われた総合学科教育の成果を検証することである。

1994年にスタートした「第3の学科」総合学科は、普通科と専門学科の2本立てであった戦後の高校教育の枠組みを変えた。総合学科において生徒は、自身の興味や進路に応じて、普通科目と職業科目の両方を幅広く選択履修することができる。このような新しい学科が創設された背景には、「普通科→進学」「職業学科→就職」という固定的な考え方から生まれる偏差値序列を打破することに加え、若者の進路決定が先送りされる現状をむしろ肯定的に捉えていこうというねらいがあった。つまり、将来の進路が不明確な生徒を受け入れ、「モラトリアムを積極的に評価する」(菊地 1996, p. 36) 姿勢である。総合学科の制度的な評価のためには、このように入学前に進路が「未定」であった者が、入学後の3年間の総合学科の学習や生活の中で、どのように進路を決めていくのかを検証することが必要である。にもかかわらず、これまでの総合学科に関する研究は、特徴である科目選択制や生徒の進路意識などに注目したものは多いが、将来の進路が不明確な生徒がどのように進路を選択していったのか、という分析は不十分であった。本稿では、ある総合学科高校における3年間のパネル調査の結果から、入学時には高校卒業後の進路が不明確であった生徒たちが、高校生活の中でどのように進路を決めていくのかを検討する。具体的には、学習時間や成績、カリキュラムによって、生徒の進路選択にどのような違いがあるのかを見ていく。本研究における仮説は、学習時間や成績よりも、生徒が実際に履修した選択科目の方が、その後の進路選択に重大な影響を与える、というものである。つまり、「学習時間・成績→進路選択」という関係よりも「カリキュラム→進路選択」という関係性が強いことを検証する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、次の2節で総合学科や進路未定者に関する先行研究をレビューする。続く3節では調査方法と調査対象校における教育の実際を見る。そして、4節では入学前に進路が「未定」であった者に注目しその特性を見る。さらに、5節では進路「未定」者の進路選択の動向を分析する。最後に、6節で本研究の知見と課題をまとめた。

2. 先行研究

日本では総合学科高校の歴史が長くないこともあり、総合制カリキュラムに関する実証的研究の数は限られている。教育社会学の分野に限って見ても、先行研究の多くは特徴である科目選択制度(田中 1999, 岩田 2000, 岡部 2005)や進路意識(三戸 2001)に注目しているが、その科目選択と進路選択との関係が直接的に分析されていない。特に、普通科や専門学科とは異なり、「総合制カリキュラム」を「選択的」に履修する総合学科の最大の特徴が注目されてこなかった。また、使用されているデータも一度きりの調査データか回顧データである。

また、進路未定者に関する先行研究の多くは、「誰がどのように無業者になるのか」という視点で研究を行っている(粒来 1997, 荻谷他 1997, 2001, 2002, 耳塚 2000, 2003, 酒井他 2004など)。つまり、最終的な進路決定先が「未定」となった者を「進路未定者」とみなし、研究対象としているのである。これらの研究に対し、藤原他(2008, p. 247)は、「進路希望における未定」を分析対象としている。しかし、藤原らの研究も、未定者が生み出されるプロセスを詳細に分析しているが、進路希望とはいえ、最終的に進路未定になってしまう要因を把握しようとする点は、他の多くの先行研究と同じである。

これまで、進路未定者に関する研究では、「結果としての未定」に注目してきたが、総合学科での進路選択を考える場合、重要なのはむしろ「出発点としての未定」である。繰り返しになるが、総合学科における進路選択の問題を考える場合、注目すべきは入学前に「未定」であった者が、3年間の総合学科の学校生活の中でどのように具体的な進路先を選んでいくか、ということである。本研究では特に、入学前の進路希望を「未定」とした者に焦点を当て、入学後の高校3年間でどのように就職・進学などの進路を選択していくのかを検討する。このように、先行研究の多くは「高校卒業後の最終的な進路先としての未定」に注目するのに対して、本研究では「高校入学前の当初の進路希望としての未定」に着目し、その後の進路選択の過程を分析する。

本研究で使用するデータは、在学中の計3回のパネル調査に加え、調査対象校による3回の進路希望（進路先）調査の結果である。本稿では、ある総合学科高校における3年間のパネル調査の結果から、「総合制カリキュラム」と生徒の進路選択の関係をダイレクトに検証する。本稿の特色は、総合学科高校における生徒の進路選択のダイナミックな変化の動向と過程を、複数時点でのデータをもとに解明する点にある。

3. 調査の概要

3-1 調査方法

前節でも触れたように、本研究の特徴は一回限りの調査データや回顧データではなく、高校3年間の各学年における計3回のパネルデータを用いている点である。質問紙調査は2004年度に調査対象校（A校）に入学した生徒200人全員を対象に、3年次になった2006年度まで実施された。回答は個人の実態や意識を追跡するために記名式としている。調査では希望する進路に加え職業や進路、学校生活に対する意識などを聞いた。3回の質問紙調査では、長期欠席者などを除いた在籍者全員に調査票を配布し、そのすべてを回収した。第1回調査（2004年10月実施）の回答者は198人、第2回（2005年11月実施）は195人、第3回（2007年1月実施）は192人であるが、今回分析の対象とするのは、3回すべての調査に回答をした191人（男子100人・女子91人）である。調査対象者数（入学者数）200人に対して、有効回答者数が191人であり、有効回収率は95.5%になる。

さらに、3回の質問紙調査に加えて、3年次の7～8月にかけてインタビュー調査を行った。インタビューの対象者は入学前から2年次にかけて進路未定を選んだ者を中心に6人を選んだ。インタビュー調査の時期は、ちょうど就職試験、あるいは進学の場合は推薦入学試験の準備時期にあたるころであり、まさに進路選択のピーク時と言える。このように、本研究では、回顧データを用いず、進路選択の過程にある当事者の声をリアルタイムで聞いている。これは、進路未定から就職や進学などを具体的に選択していく過程を詳細に分析するためである。

3-2 調査対象校

調査対象となったA校は、総合学科創設初期に専門高校（工業高校）から総合学科高校に転換した。生徒数は1学年約200人、全校で約600人の中規模の学校で、地方都市に所在する。男女比はほぼ半々だが、総合学科入学生の多様な進路志望を反映してか、生徒の学力層は比較的幅が広く、中学校で中位から下位の生徒が入学してくる。以下では総合学科教育の特色をA

校の場合を例に紹介しよう。

まず、総合学科の最大の特徴である科目選択制度である。A校では1年次の7月に最初の時間割を提出する。この際、翌年の2年次だけでなく3年次の科目も同時に決める。担任との面談などを経て1年次の9月が最終締め切りとなる。A校の系列¹⁾は、総合学科開設以来「人間科学」「福祉・健康科学」「国際ビジネス」「環境工学」「生産技術」の5つであったが、2007年度からは「環境工学」を「生産技術」に統合し4系列となった。生徒は1年次では普通科目を中心とした必修科目を学び、2年次からは4つの系列に沿った選択科目（普通科目と専門科目から成る）を中心に学ぶことになる。

次に、総合学科のもう1つの特徴であるキャリア教育について触れよう。総合学科では1年次に「産業社会と人間」というキャリア教育を主眼とした原則履修科目があり、その授業の中で前述の科目選択指導が行われる²⁾。「産業社会と人間」では、科目選択指導以外に、進路に関する様々な体験学習や講演会などが行われ、まさに総合学科の教育理念を体現したような科目である。また、2年次ではインターンシップを実施している。現在では普通科高校などでもインターンシップが行われているが、A校では総合学科のキャリア教育の一環として、総合的な学習の時間などを使って、マナー講座や講演会、企業調べなど、事前・事後学習にも力を入れていることが特徴である。

このように、総合学科では1年次の初年度教育が重要とされる。入学して数ヶ月のキャリア教育の経験などから、1年次の夏休み前に2・3年次のカリキュラムについて考え、さらにはある程度の将来の見通しをつけなければならない。というのは、2・3年次の選択科目を決定する際には、学校側も将来の進路を決めてから、その進路に必要な科目を選択するように指導するからである。このような科目選択制度の一般化によって、進路選択が早期化されることが予想される。特に進路未定のまま入学してきた生徒たちにとって、高校入学後すぐに進路を決め、選択科目を決定することは難しい。結果として、そのような生徒はとどろあえずの進路選択（＝科目選択）をすることになる。さらに、予想されるのは、このような1年次の早期の科目選択が、その後の進路希望や卒業後の実際の進路選択を大きく左右する可能性である。本稿で、生徒の進路選択に対するカリキュラムの影響を重視するのはこのような理由による。

4. 進路未定者の特性

4-1 進路希望の変化

具体的な分析に入る前に、調査対象者191人全員の進路希望の変化と実際の進路決定先を確認しておこう。表1は入学前から入学後3年間の進路希望と卒業後の実際の進路決定状況を示したものである³⁾。これは筆者による3回の質問紙調査の結果に加え、A校が実施した3回の進路希望（進路先）調査の結果も示した、6時点における進路希望（進路先）の状況である。ここからは、「フリーター」と「未定」を合わせて「未定者」と呼ぶことにするが、6時点での「未定者」の数の推移は「55人→15人→28人→5人→3人→6人」となっている。未定者の多い時期に注目すると、入学前に高卒後の進路が「未定」であった者が55人と約3割存在している。この55人が2節で述べた「高校入学前の当初の進路希望としての未定」者であり、本研究の分析の中心となるので、以下でその特性と進路選択の動向を詳しく確認していくことにする。また、後でも言及するが、2年次において未定者が28人とやや増加している点にも注意が必要である。どうやら1年次の科目選択（＝進路選択）にやや迷いが生じているようだ。

表1 進路希望の変化と進路先 (人数(%), N=191)

進路希望	入学前	在学中				卒業後 (進路先)
		1年10月	2年11月	3年4月	3年1月	
就職	21(11.0)	59(30.9)	49(25.7)	56(29.3)	61(31.9)	61(31.9)
大学	大 22(11.5)	46(24.1)	41(21.5)	50(26.2)	46(24.1)	43(22.5)
短大	大短専 45(23.6)	25(13.1)	27(14.1)	31(16.2)	39(20.4)	40(20.9)
専門	短専 47(24.6)	42(22.0)	42(22.0)	49(25.7)	38(19.9)	39(20.4)
その他	無回答 1(0.5)	4(2.1)	4(2.1)	—	4(2.1)	2(1.0)
フリーター	—	0(0.0)	1(0.5)	—	2(1.0)	6(3.1)
未定	55(28.8)	15(7.9)	27(14.1)	5(2.6)	1(0.5)	—

4-2 進路未定者の特性

入学前に高卒後の進路が未定であった者は、すでに進路を決めていた者たちと比べてどのような違いがあるのか。ここではクロス集計表を用いて、進路未定者 55 人の特性を、就職希望者、進学希望者と比較しながら、(1) 性別、(2) 学習時間・成績、(3) カリキュラム、の3つの観点から見ていこう。

(1) 性別

入学前の進路希望別に男女の割合の違いを示した表2を見ると、進学希望者では女子の割合が高く、就職希望者では男女の差はない。それに対して、未定者では女子に比べ、男子の割合が高いのが特徴である。

表2 入学前の進路希望と性別の関係 (人数(%))

進路希望(人数)		男	女	計
進学	4大(22)	19(19.2)	3(3.3)	22(11.6)
	4大か短大・専門(45)	26(26.3)	19(20.9)	45(23.7)
	短大か専門(47)	8(8.1)	39(42.9)	47(24.7)
就職(21)		11(11.1)	10(11.0)	21(11.1)
未定(55)		35(35.4)	20(22.0)	55(28.9)
計(191)		100(100.0)	91(100.0)	191(100.0)

$$\chi^2 = 37.971 \quad d.f. = 5 \quad p = 0.000$$

注) 進路希望の「無回答」1人は省略してあるが、計には含まれている

(2) 学習時間・成績

各学年における家庭学習時間と2・3年次の成績(5段階の自己評価)の平均値を示したもの

が表 3 である。未定者の学習時間は 4 大希望者と比べると少ないが、就職希望者より多い。一方、成績自己評価が最も高いのは 2・3 年次とも未定者である（1 年次では質問せず）。未定者の特徴としては、勉強する時間はそれほど多くはないが、自らの成績に対する評価は高い、ということになる。

表 3 入学前の進路希望と学習時間・成績の平均値の関係

進路希望(人数)	学習時間			成績	
	1 年次	2 年次	3 年次	2 年次	3 年次
進学 { 4 大(22) 4 大か短大・専門(45) 短大か専門(47)	0.57	0.50 †	0.75	2.45	2.32*
	0.54	0.30	0.47	2.71	2.62
	0.60	0.18	0.55	2.66	2.49*
就職(21)	0.40	0.19	0.19	2.67	2.48
未定(55)	0.57	0.26	0.39	2.89	2.93
計(191)	0.56	0.27	0.47	2.72	2.62

** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$, † < 0.10 (「未定」と比較した場合の t test)

注) 進路希望の「無回答」1 人は省略してあるが、計には含まれている

(3) カリキュラム

普通科目（英語Ⅱと数学Ⅱで各 0～4 単位）と専門科目（工業・商業・福祉の合計で 0～32 単位）の履修単位数の状況を表 4 で示す。進学希望者は普通科目が多く、専門科目が少ない。逆に、就職希望者は専門科目が多く、普通科目が少ない。これは当然の結果であろう。未定者はちょうどその中間的な履修形態である。

表 4 入学前の進路希望と履修単位数平均値の関係

進路希望(人数)	普通科目		専門科目
	英語Ⅱ	数学Ⅱ	
進学 { 4 大(22) 4 大か短大・専門(45) 短大か専門(47)	3.27**	3.27**	8.82**
	3.20**	1.82	9.91**
	3.11**	1.23 †	11.06*
就職(21)	1.52*	1.52	21.71
未定(55)	2.36	1.75	17.71
計(191)	2.75	1.79	13.71

** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$, † < 0.10 (「未定」と比較した場合の t test)

注) 進路希望の「無回答」1 人は省略してあるが、計には含まれている

また、表 5 はそのような科目を選択した時期について尋ねた結果である。「1 年次の前期に時間割の作成を始めるのは時期が早い」という質問に「そう思う」と「まあそう思う」と答えた割合は、4 大や就職など進路希望が明確な生徒ほど低い。一方、同じ進学希望でも「4 大

か短大・専門」「短大か専門」と具体的な進学先について迷っている生徒はやはり高くなっている。未定者は全体（計）の割合に近く、8割が「時期が早い」と答えている。これらの数字からも、前節で述べた「進路選択の早期化」の状況が確認される。

**表 5 入学前の進路希望と「科目選択の時期が早い」との関係
(人数(%)は「そう思う」と「まあそう思う」の合計)**

進路希望(人数)	回答
進学 { 4 大(22)	16(72.7)
4 大か短大・専門(45)	38(84.4)
短大か専門(47)	38(80.9)
就職(21)	15(71.4)
未定(55)	44(80.0)
計(191)	151(79.5)

$$\chi^2=11.498 \quad d.f.=15 \quad p=0.717$$

注) 進路希望の「無回答」1人は省略してあるが、計には含まれている

5. 進路未定からの進路選択

5-1 各時点における未定者の動向

入学前に進路未定であった者も、入学後の3年間のある時点でほとんどの場合、就職か進学
の決定を行う。それでは、未定から就職や進学などにいつ、どのように進路希望を変更しているのか。ここでは入学前「未定」者55人の動向を確認する前に、調査対象者191人全員の各
時点での未定者の動向を図1で確認しておこう。なお、図1では帯グラフ内の数字は各時点での
選択人数を示している。さらに、各時点での未定者が次時点でどのような進路希望に変化し
ているかということに焦点を当てるために、図1では矢印を用いている。各時点間の矢印の太
さは未定からの選択人数の多さを示し、矢印の近くに実際の選択人数を示してある。

まず、入学前から1年次の変化を見ると、55人の未定者のうち、半数以上の25人が就職に
変更している。進学に変更した20人と合わせて45人となり、入学前未定者の8割以上が入学
後半年しか経っていない1年次の10月の時点で、就職や進学の何らかの進路を決めているこ
とになる。これは、1年次の入学直後から夏休み明けにかけて行われる科目選択の影響が大き
いのだろう。この時期に生徒は将来の進路を考え、その進路に沿った科目を履修するよう要求
される。さらにもう1つ、入学直後のこの時期では、進学よりも就職への変更者が多いことを
確認しておく。あくまでも、入学直後の未定者の進路選択の傾向は「未定→就職」が中心であ
る。また、入学前に未定だった55人のうち、1年次でも未定のまま変化しない者は9人だけ
であり、未定者は大幅に減少している。全体でも1年次では未定者の数は15人に減少した。

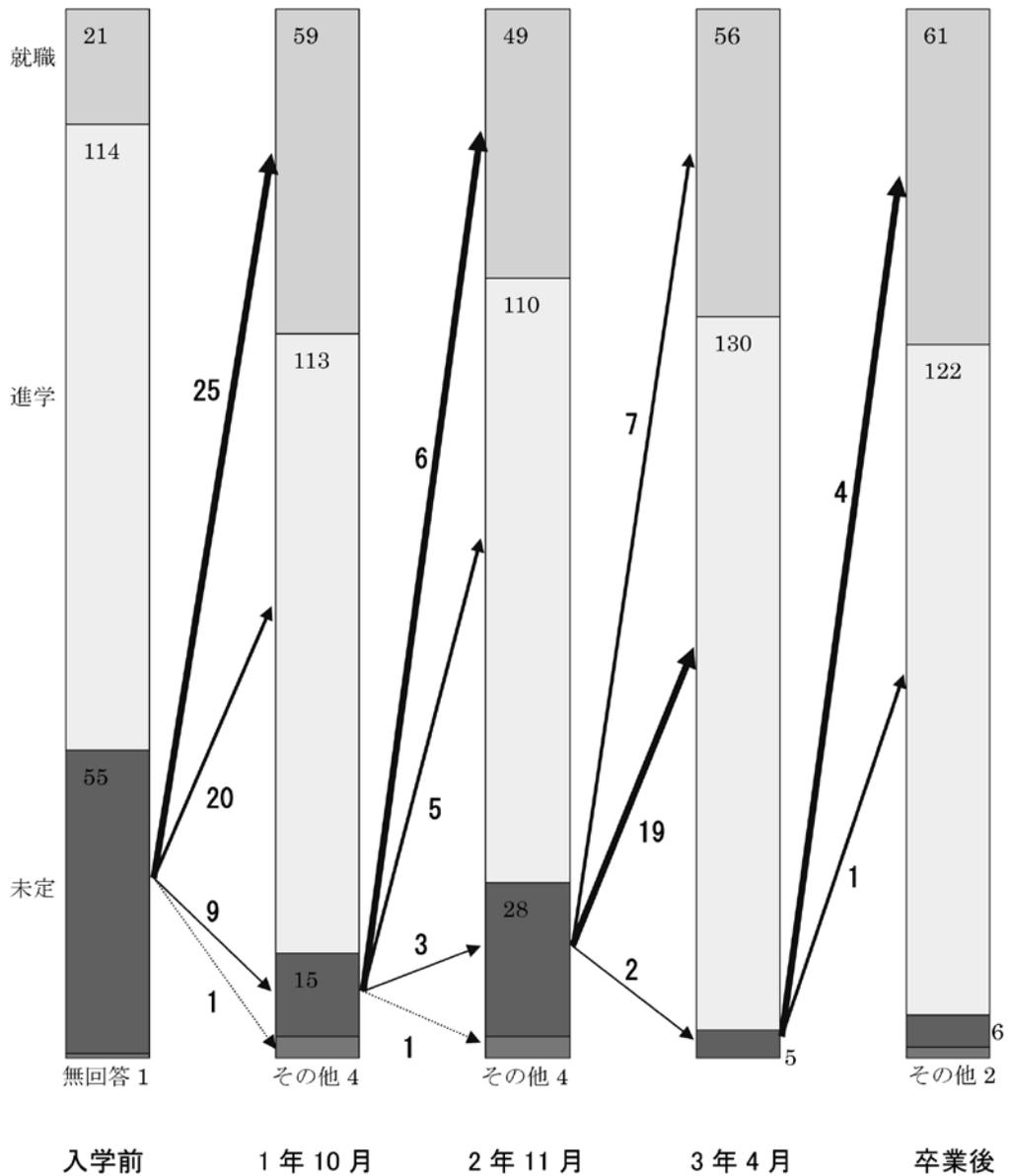
次に、1年次から2年次への変化である。1年次における未定者15人のうち、2年次では6
人が就職に、5人が進学に変更している。就職と進学の数ほぼ同数であるが、2年次全体の
就職希望者の数(49人)が進学希望者(110人)の半分以下であることを考えると、この時点
でもやはり「未定→就職」という変更が未定者の進路選択のメインストリームであることがわ
かる。また、1年次の未定者15人のうち2年次でも未定のまま変化しない者は3人のみであ

る。一方、全体では2年次で未定者が28人と、1年次に比べてほぼ倍増していることには注意が必要である。これは、3節でも述べたように1年次には科目選択の必要性からとりあえず進路を決めた者が多かったが、その選択した科目の授業が実際に始まる2年次になると、本当にこの科目や進路で良かったのだろうか、迷いが生じたためではないか。いずれにしても、1年次から未定のままの数は3人だけなのだから、2年次の28人の未定者のうち残りの25人は就職や進学など何らかの具体的な進路希望から流入してきたことになる。

続いて、2年次から3年次の変化であるが、2年次における未定者28人の3年次での変更状況を見ると、約7割の19人が進学となっている。この時点において「未定→就職」から「未定→進学」へと未定者の動向が大きく変化しているのだ。進学のための入学試験に比べ、就職試験は時期が早く、この時点での就職への変更は現実的に難しいという一般的な解釈も可能であろう。しかし、2節でも触れたように、「総合制カリキュラム」を「選択的」に履修する、という総合学科の最大の特徴を考慮すると別の解釈も可能である。3節でも述べたように、A校では1年次は必修科目である普通科目中心の共通カリキュラムで学ぶが、2年次から自分が選んだ工業・商業・福祉などの専門科目の授業や実習が始まる。1年間の専門教育を経験した3年の4月には、やはり自分はこの分野に向いていないということもわかるし、あるいは逆に、この分野をもう少し大学や専門学校で学んでみたいという気持ちになる者も出てくるかもしれない。つまり、逆説的な言い方になるが、専門（職業）教育を受けることによって、生徒は就職から乖離してしまっている状況が想像されるのだ。もう1つ、選択科目以外の要因として考えられるのは、2年次の10月に行われるインターンシップの影響である。就職希望者を中心に実施される3日間のインターンシップによって、やはり自分はこの職種に向いていない、さらには、自分にはまだ社会に出て働くことは無理なのではないか、という疑問や不安が高校生に生じても不思議ではない。再び逆説的な言い方をすれば、キャリア教育によって生徒が就職を回避する場合が考えられる。学校側が意図したキャリア教育が逆機能し、生徒を職業生活から遠ざけ、進学へと誘うのであればなんとも皮肉な結果と言わざるを得ない。また、2年次の28人の未定者のうち3年次になっても未定のまま変化しない数は2人のみとなった。3年次では未定者の数は全体でも5人となり、大幅に減少している。

最後に、3年4月から卒業後の実際の進路先への状況を見ておこう。3年次の未定者5人のうち4人が就職、1人が進学となり、未定のままの者はいない。また、全体では最終的に卒業後に進路未定となった者は6人であるが、そのうち3年の4月に未定であった者がいないことから、この「未定」者6人は就職や進学を希望していたものの、就職活動や大学入試が上手く行かず、進路希望が叶えられなかった者である可能性がある。

以上、各時点から次時点への未定者の進路選択状況を見てきたが、全体を通して確認できる傾向がある。それは、「未定→未定」の数が意外と少ないということである。未定者が全体に対して占める割合が小さいこともあるが、各時点で未定だった者が次の時点でも引き続き未定である場合は「9→3→2→0」となり、就職や進学への変更に比べても少ない数となっている。つまり、「未定」という進路希望は固定的なものではなく、むしろ一時的な状況ではないのかと考えられる。ある者がある時期に未定であっても、別の時期には他の進路を希望する場合や、あるいは逆に、入学前や1年次に特定の進路を決めていたとしても時間が経ち未定になる場合があるのかもしれない。このように、未定者が一貫していないことを考えると、総合学科における高校生の進路選択は非常に流動的なものであると考えられる。誰がいつ「未定」になってもおかしくはない状況だと言えよう。



注) **→** 未定からの選択が最も多い
→ 未定からの選択が2番目に多い
→ 未定からの選択が3番目に多い
→ 未定からの選択が最も少ない

図1 191人全員の各時点における「未定」からの進路希望の変化(人数)

5-2 入学前進路未定者 55 人の動向

ここまでは各時点における進路未定者の動向を確認してきたが、ここからはいよいよ本稿の分析の中心である、入学前に進路が「未定」であった 55 人の 3 年間の進路選択の状況を確認していく。入学前の進路「未定」者は、高校 3 年間の各時点でどのような進路を希望していたのか。55 人の 3 年間の進路希望の変遷を示したものが図 2 である⁴。なお、図 2 の帯グラフ内の人数は各時点での選択人数を示している。就職希望者は 2 年次でやや減少するが、3 年次でやや増加する。学年が進むにつれて増加するのが進学希望者で、逆に未定者は減少する。時間の経過とともに未定から進学に希望が移っているのは、図 1 で確認した全体の傾向と同じである。未定者だけに注目した場合、各時点における未定者の合計数は「55→9→8→0→3」と推移している。時期としては入学前から 1 年次にかけて大幅に減少しているのが特徴的である。やはりここでも図 1 で見たように、総合学科においては入学してすぐの 1 年次、それも前半に、科目選択などとの関係から、生徒の進路選択に大きな変化が生じていることが確認できる⁵。

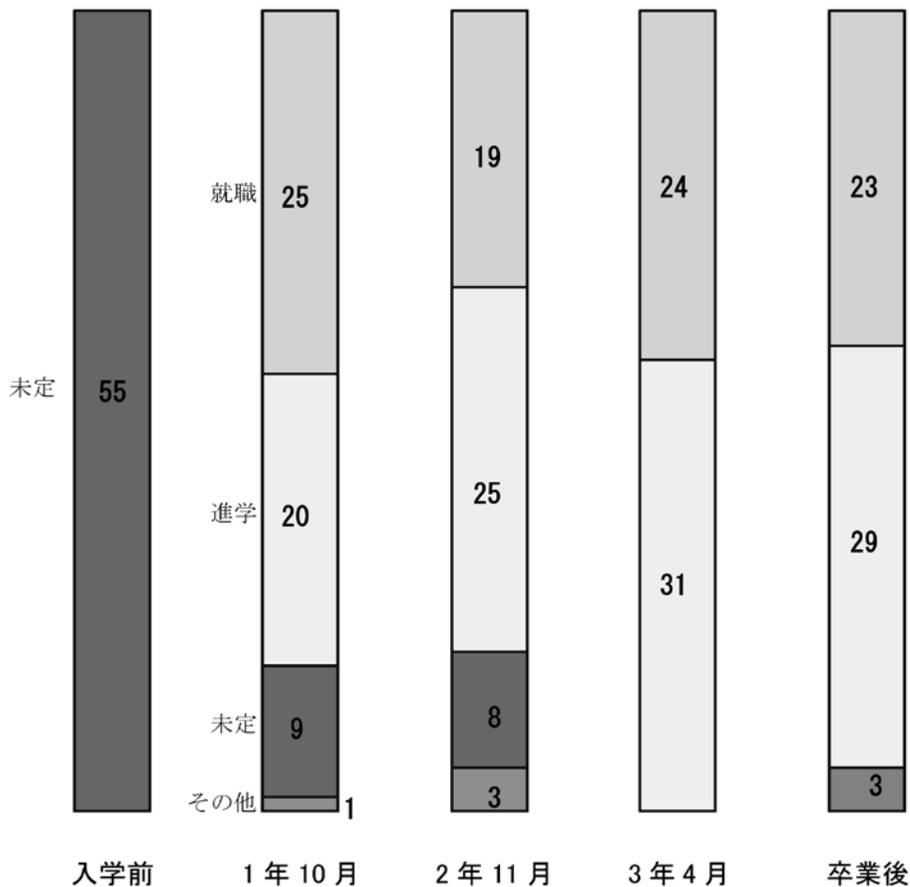


図 2 入学前進路「未定」者 55 人の 3 年間の進路希望の変化と進路先（人数）

これまで見てきたように、総合学科においては、特に進路未定者にとっては、入学から1年次にかけての進路選択が重要となっていることが確認できた(図1及び図2)。それでは、その入学から1年次にかけての進路選択にはどのような要因が関係しているのか。ここでは、前節で入学前進路未定者55人の特性を進学希望者や就職希望者とクロス集計表で比較した時と同様、(1)性別、(2)学習時間・成績、(3)カリキュラム、の3つの要因を検討する。ただし、分析の対象となるのは前節の191人全員とは異なり、入学前進路未定者55人のみである。図1及び図2において確認したように、入学前の55人の未定者の8割以上が、1年次の10月には就職25人、進学20人とどちらかの進路を選択していた。そこで、ここでは進路「未定」者が「進学」と「就職」に分かれる要因は何か、ということを検証することにする。なお、ここでは平均値の比較などのクロス集計表は省略し、3つの要因を同時に考慮したロジスティック回帰分析において検証する。

表6 「未定」(入学前) → 「就職」(1年次10月)の規定要因分析

	B	Exp(B)
性別(男性)ダミー	-0.97	0.908
家庭学習時間(1年次)	-1.044	0.352
成績自己評価(2年次)	0.291	1.337
数学Ⅱ(普通科目)ダミー(2年次)	0.558	1.747
専門科目単位数(2・3年次)	0.073 *	1.076
定数	-1.682	0.186
-2対数尤度		48.422
N		45
モデル χ^2		13.404 *
HosmerとLemeshowの検定(有意確率)		0.590
Nagelkerke R ²		0.345

** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$, † : $p < 0.10$

表6がその結果である。従属変数は、入学前に進路希望が「未定」だったが1年次10月に「就職」希望を選択した者を1、入学前に進路「未定」だったが1年次10月に「進学」を選択した者を0とした。独立変数は、個人要因を示す基本属性として性別ダミー(男子=1、女子=0)を投入した。さらに、家庭要因を表す変数として、1年次の家庭学習時間(3時間以上=3.5、2~3時間=3、1~2時間=2、30分~1時間=1、30分以内=0.5、0分=0)を投入した。また、学校要因を見る変数としては、2年次における5段階の成績自己評価を加えた。そして、学校要因を表すもう1つの指標として、カリキュラムに関する2つの変数を投入している。1つは普通科目の「数学Ⅱダミー」であり、2年次で数学Ⅱ(2単位か4単位)を選択した者を1、全く選択しなかった者を0とした。もう1つは、専門科目の2・3年次の総履修単位数(0~32単位)である。なお、1年次の10月における進路希望の要因を見る変数として、2・3年次の選択科目を使用するのは、3節でも見たように、全員が2・3年次の科目選択を1年次の9月までに終えてしまい、原則としてその後の変更は認められないからである。つまり、1年次の前期には2・3年次の選択科目が実質的に決定している状態なのである。よって、1年次での進路希望の変化を表す要因として、2・3年次の科目履修状況(実際はまだ「履修」しておらず、「選択」しているだけの状態であるが)を「予測効果」⁶として使用することにする。同様に、

2年次の成績自己評価も「予測効果」として使用している。表6の結果を見ると、統計的に優位な効果を示しているのは専門科目の単位数のみである。サンプル数が45人と少ないので確定的なことは言えないデータではあるが、入学前の進路「未定」者が1年次に「就職」希望に変更することに効果を持つのは、専門科目を多く履修することであった。

6. 結語

本稿では、総合学科高校における進路未定者の動向、特に入学前に高校卒業後の進路を「未定」としていた55人に焦点を当てて、その特性や3年間の進路希望の変化などを確認してきた。本稿の分析において明らかになった点を以下に整理しておこう。

まず、入学前進路未定者55人を就職希望者や進学希望者と比較した場合の特徴としては、次の3点が示された。(1)性別では男子の割合が進学希望者に比べてやや多い。(2)学習時間は大学進学希望者に比べると少ないが、成績に対する自己評価は他のグループよりも高い。(3)カリキュラムについては、普通科目(英語と数学)の単位数は進学希望者より少ないが、就職希望者よりは多くの科目を選択している。逆に、専門科目(工業・商業・福祉)に関しては就職希望者よりは少ない単位数だが、進学希望者よりは多くの科目を履修していた。

次に、進路未定者が就職、進学の具体的な進路を希望する時期としては、入学前から1年次にかけてが多かった。入学前進路未定者55人の8割以上が1年次には就職か進学のどちらかの進路を希望していた。言い換えれば、入学前に進路未定だった者の8割以上が、入学後半年しか経過していない1年次の10月には、「未定」状況から脱却していたことになる。

最後に、入学前から1年次にかけての未定からの進路変更(就職あるいは進学)には、性別や学習時間・成績などの要因よりも、1年次に選択したカリキュラムの要因が影響していた。中でも、英語や数学などの普通科目ではなく、工業や商業などの専門科目の履修が、進路未定者の進路選択に有意な効果を示していた。

以上のように、総合学科における高校生の進路選択において、高校生活前半の時期にカリキュラムの効果(特に専門科目)が見られる、という結果は、小西(2012a, 2012b)が就職及び進学希望者の1年次から2年次にかけての進路変更の場合に確認した結果とほぼ同様の傾向を示す。本稿での分析では、進路未定者についても、入学後間もない時期での専門科目の履修がその後の具体的な進路選択に対する影響を持つことを示唆している。これはやはり、総合学科が持つ制度的な特徴、つまり1年次の「産業社会と人間」の履修とそれに伴う科目選択の影響が大きい、ということであろう。「モラトリアムを積極的に評価する」という目的で設置されたはずの総合学科において、このように入学直後の科目選択が、その後の進路希望の変化や実際の進路先決定に大きく影響しているとすれば、やはり当初の理念と反することになる。設置から20年が経過した総合学科という制度は、このような現状を考慮して、創設時の理念を再確認し、その理念自体の見直しも含め、制度の運用や実際に行われている教育の内容までもを検証する必要があるだろう。

そのような総合学科教育検証の1つの試みとして、筆者は今回分析した同一パネルを追跡し、卒業後3年が経過した2010年に質問紙調査を実施し、その後数名の生徒にインタビュー調査を行っている。今後も同一パネルを量的・質的調査の両面で追跡し、高校生活と卒業後の職業生活・社会生活との関連について分析したいと考えている。ただし、本研究はある総合学科高校1校のみを対象としたケース・スタディである。本事例研究の成果を異なるタイプの総合学科高校と比較し客観的に分析するためにも、今後は全国の総合学科高校を対象にした、カリキュラムや進路選択に関する調査も必要であろう。

注

- 1 総合学科の選択科目には「総合選択科目」と「自由選択科目」があり、前者の集まりが総合選択科目群、つまり系列を指す。学科やコースとは異なり、生徒が属するものではなく、科目選択や進路選択の目安とされる。分析対象となった10期生のパネル(191人)を系列別に見ると、「人間科学」50人(26.2%)、「福祉・健康科学」51人(26.7%)、「国際ビジネス」17人(8.9%)、「環境工学」13人(6.8%)、「生産技術」39人(20.4%)となっている。
- 2 総合学科創設当時の原則履修科目(高等学校必修科目とは別に、総合学科の生徒に原則として履修させる科目)は、「産業社会と人間」「情報に関する基礎的科目」「課題研究」の3つであった。その後、学習指導要領の改訂(平成11年3月告示)に伴い、教科「情報」と「総合的な学習の時間」が創設されたことにより、「情報に関する基礎的科目」と「課題研究」は総合学科の原則履修科目ではなくなっている。
- 3 入学前、3年4月、卒業後はA校の調査によるものである。入学前の進学希望は「4大」「4大か短大・専門学校」「短大か専門学校」の3つの選択肢で聞いており、「その他」(1人)は無回答者である。3年1月は進路内定者を含んだ進路希望である。卒業後の未決定者はすべて「フリーター」としている。
- 4 図1及び図2では、卒業直前の3年1月の進路希望は、すでに進路先が内定した者が多く卒業後の進路先とほぼ同じになるので省略してある。分析では「大学」「短大」「専門」をまとめて「進学」とし、「フリーター」と「未定」をまとめて「未定」とした。よって、進路区分は「就職」「進学」「未定」の3つとなる。「その他」は何らかの進路を希望しているものと考えられるので図には示したが、数が少ないので以下のロジスティック回帰分析では除外した。
- 5 この1年次前半に未定者が急激に減少する傾向は、他の学科と比較した場合の総合学科の特徴と言える。例えば、中村他(2007)の報告では、普通科においては未定者の数は入学時(1年1学期)から2年2学期まではそれほど減少せず、3年1学期になって急激に減少している。一方、同じデータによれば、専門学科では3年間を通して就職希望者が過半数を占めており、未定者の数に大きな変化は見られない。
- 6 「予測効果(anticipatory effect)」とは、「後の期間の予測変数が以前の期間のイベント生起に関係しているかもしれない」ということである(Singer & Willett 訳書, 2014, p. 439)。例えば、「うつ病」という従属変数を発症する要因として「両親の離婚」という独立変数を考える場合、実際には離婚の数年前から抑うつ状態が始まっている、という仮説を立てる場合などが考えられる。つまり、これは「逆方向因果」ではなく、「両親の離婚」は「時間軸の上では後の時点における状態」を表しているが、「実際には公的な意味で変化が起こる前から始まっている、より長い『過程』を記述している」と考えることである(Singer & Willett 訳書, 2014, p. 439)。

文献

- 荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学—』東信堂。
- 荒牧草平, 2003, 『現代都市高校におけるカリキュラム・トラッキング』『教育社会学研究』第73集, pp. 25-42.
- 藤原翔・中村高康・岩田考, 2008, 『進路希望の構造と変容—進路多様校を対象とした学校パネル調査データの分析—』『桃山学院大学社会学論集』第41巻, 第2号, pp. 213-265.

- 岩田考, 2000, 「『選択制』の光と影—『総合学科』高校における科目選択制を事例として—」東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科『学校教育学研究論集』第3号, pp. 103-115.
- 荻谷剛彦・粒来香・長須正明・稲田雅也, 1997, 「進路未決定の構造—高卒進路未決定者の析出メカニズムに関する実証的研究—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第37巻, pp. 45-76.
- 荻谷剛彦・濱中義隆・千葉勝吾・山口一雄・筒井美紀・大島真夫・新谷周平, 2002, 「ポスト選抜社会の進路分化と進路指導」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻, pp. 127-154.
- 荻谷剛彦・濱中義隆・大島真夫・林未央・千葉勝吾, 2003, 「大都市圏高校生の進路意識と行動—普通科・進路多様校での生徒調査をもとに—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42号, pp. 33-63.
- 菊地栄治, 1986, 「中等教育における『トラッキング』と生徒の分化過程—理論的検討と事例研究の展開—」『教育社会学研究』第41集, pp. 136-150.
- 菊地栄治, 1996, 「高校教育改革の『最前線』」耳塚寛明・樋田大二郎編『多様化と個性化の潮流をさぐる—高校教育改革の比較教育社会学—』学事出版, pp. 29-44.
- 小西尚之, 2012a, 「総合学科高校におけるカリキュラム・トラッキング—3年間のパネル調査から—」『カリキュラム研究』第21号, pp. 29-42.
- 小西尚之, 2012b, 「総合学科高校のカリキュラムと生徒の進路選択—何が『進学』と『就職』を決めるのか—」『日本高校教育学会年報』第19号, pp. 34-42.
- 耳塚寛明(研究代表者), 2000, 『高卒無業者の教育社会学的研究』平成11~12年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(お茶の水女子大学文教育学部教育社会学研究室)。
- 耳塚寛明(研究代表者), 2003, 『高卒無業者の教育社会学的研究(2)』平成13~14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(お茶の水女子大学文教育学部教育社会学研究室)。
- 三戸親子, 2001, 「総合学科における生徒の進路意識形成」『教育社会学研究』第69集, pp. 103-122.
- 中村高康編, 2010, 『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ—』ミネルヴァ書房。
- 中村高康・岩田考・藤原翔・越智政治・西田亜希子・片山悠樹・金子嘉秀・鶴飼洋一郎, 2007, 「進路希望の一貫性と非一貫性—高校3年間の進路変容過程に関する継時的研究(2)—」日本教育社会学会第59回大会発表資料。
- 岡部善平, 2005, 『高校生の選択制カリキュラムへの適応課程—「総合学科」のエスノグラフィ—』風間書房。
- 酒井朗・千葉勝吾・濱野玲奈・広崎純子, 2004, 「高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究—A商業高校での支援活動の取り組みを通じて—」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』第2巻, pp. 85-100.
- Singer, Judith & Willett, John, 2003, *Applied Longitudinal Data Analysis: Modeling Change and Event Occurrence, First Edition*, Oxford University Press (=2014, 菅原ますみ監訳『縦断データの分析II—イベント生起のモデリング—』朝倉書店)。
- 田中葉, 1999, 「『総合選択制高校』科目選択制の変容過程に関する実証的研究—自由な科目選択の幻想—」『教育社会学研究』第64集, pp. 143-162.
- 粒来香, 1997, 「高卒無業者の研究」『教育社会学研究』第61集, pp. 185-209.